

## 私論「スターの愛称」そして、教育について少しだけ

いきなりですが、子どもの頃に、親戚の集まりで、叔父さんの一人が俳優の石原裕次郎氏を「裕ちゃん」と呼んだのにひどく驚いた記憶がある。その頃の石原裕次郎氏は「太陽にほえろ！」や「西部警察」のボス役のおじさんで、「ちゃん」づけで呼ばれるイメージではなかったからである。

広い芸能界（映画スターやロックミュージシャンを含めて）を見渡したときに、「ちゃん」づけの愛称で呼ばれる男性スターは実に少ない。だって、「キムタク」はやっぱり「キムタク」だし、タモリ氏は「タモさん」と呼ばれても「タモちゃん」とは呼ばれることはない。明石家さんまは「さんちゃん」と呼ばれることはあっても、愛称というほど浸透していないし、少なくとも若い頃はそう呼ばれてはいなかったと思う。ようやく思いつくのは、矢沢永吉氏をわれわれ世代が「永ちゃん」と呼んでいるくらいではないだろうか。ここで、私論を述べさせてもらうなら、「ちゃん」づけの愛称で呼ばれる男性スターはその時代の特定の世代にとっては憧憬の対象であり、もっと言うなら、その時代のある種のシンボルとさえいえる。「ちゃん」づけにはファンのおこがれが込められており、気やすくないのである。

長い前置きになったが、全国的に「あだ名禁止」の校則を打ち出している小学校が増えてきているそうである。その背景には、あだ名がいじめにつながるおそれがあるらしいが、こうした校則には賛否両論さまざまなお意見があるだろう。そのあだ名が愛称なのか蔑称なのかの判断は難しいし、近年のいじめの苛烈さを考えれば、そうした校則もやむを得ないとも思える。しかし、一方で子どもたちをカプセルの中で無菌状態で培養するようにするのが本当に良いのかとも思え、実に悩ましい。ただ一つ言えるのは、教育や学びには絶対的な正解はないので、学校や生徒の実態に応じ、やってみる価値はあるということだ。やった上で、検証すればよいのである。結論をすぐに出すのではなく、教育活動や学びにもそういう試みをためす余裕くらいあってよいであろう。

大学の頃だったか、やくざ映画のリバイバルを見ていた時。若くてかわいい顔をしたやくざがスクリーン一杯に映ったその瞬間。観客席からその筋風のおじさんの「よっ！さぶちゃん」のかけ声。映画のスクリーンに掛け声がかかるのを見たのは、これがはじめてで最後でした。俳優は演歌歌手の北島三郎氏。若い時分はやくざ映画、いや任侠物にも出ていたんです。北島三郎氏も「ちゃん」づけの愛称で呼ばれるにふさわしいスターの一人かも知れません。さて、読者の皆様。その他の「ちゃん」づけのスターに心当たりがあれば、至急学校の公開アドレスまでお知らせください。すみません、冗談です。

ちなみに、小学校低学年の時の私のあだ名は「小パンダくん」でした。「大パンダくん」もいました。1972年のパンダ（カンカンとランラン）来日フィーバーの折です。その頃はパンダみたいにかわかったんですよ。これはマジです。ちなみに、辞書的には愛称は「姓や名の略称（山本→山さんなど）」で、あだ名は「その人の性行・特徴などをとらえて、他の人が批評的な意識で付けた呼び名」だそうです。かわいかったからではなく、友だちは私の何かを見て批評していたのでしょうか。今さら気になります。

令和4年7月21日

大村城南高等学校長 中小路尚也